

全日本中学校長会賞

祖母と黄色い花

愛知県 安城市立篠目中学校 二学年

増田 早紀

令和五年九月十一日。白やパステルカラーで彩られた花祭壇の中央には、季節外れの向日葵たちと、優しく微笑む祖母の遺影があった。私はこの日、大好きな祖母と最後のお別れをした。

父方の祖母と私たち家族は、敷地内同居をしていた。祖母が亡くなる九カ月前、スキルス胃ガンが見つかり、胃を全摘出する手術を受けた。周りの腹膜播種も取り除くことができ、経過も順調だった。しかし、手術から半年後、祖母は食事が全く摂れなくなってしまう、再入院することになった。そして、腹膜播種が見つかった。余命二カ月だった。

祖母は、終身保険に加入していた。その保険には、医療とガンの特約がついていて、手術費と二回の入院費はそこから支払われた。もし、この特約が無ければ、祖母に一日でも長く生きて欲しいという「願い」と、日数とともに増える入院費への「不安」で葛藤し、私たち家族は心を擦り減らしていただろう。保険が、私たち家族の心を守ってくれた。

祖母の葬儀は、家族葬で執り行われた。祖母はお花が大好きで、池坊の門標を持つほどの腕だった。それで母は、祖母が旅立つときは立派な花祭壇にし、沢山の花で祖母を送ってあげようと考えていたそうだ。葬儀屋さんから花のリクエストを聞かれた母は、祖母が好きだった向日葵と黄色い花をお願いしていた。祖母は生前、「好きな花は黄色い花。元気をもらえるから。」と言っていた。その中でも特に向日葵が好きだった。

祖母の死亡保険金は、葬儀費用に充てたそうだ。「おばあちゃんのお金をおばあちゃんのために使えて良かった。」と、母が満足そうに話していた。

今年の夏、初盆と一周忌法要が行われた。母は、祖母が亡くなってからの費用を専用の家計簿につけていたので、見せてもらった。「死んでも、こんなにお金が掛かるんだ。」私の正直な感想だ。葬儀費用は、葬儀会社だけでなく、お寺にも何十万も支払わなければならない。そして、葬儀が終わってからも、七日参り、三十五日法要、納骨、百箇日参り、初盆、一周忌法要、と出費がかさむ。大切な家族を失った悲しみの中で、お金という現実とも向き合わなければならない。終身保険はこのためにあるのだと、私は理解した。

病气や死は、ある日突然やってくる。残された家族が後々苦労しないように、自分に合った保険に加入し、しっかり備えることが必要だ。また、どんな保険

第62回中学生作文コンクール

に入っているのか、家族で共有することも大切だ。父も母も私たちのために、終身保険と医療保険に加入している。保険は、「もしもの時」の不安を取り除き、「大丈夫だよ」と、私たちの心に寄り添い元気を与えてくれる。保険は、心に咲く黄色い花なのだ。